

# 南方（ビルマ）

連隊史に載らない

第一大隊の水無河畔の

全滅陣地

新潟県 風間 泰 一

小千谷市の秋祭りの夜である。信濃川の中州にて打ち上げる夜空の花火を一人、家の部屋の窓より見上げていた。フィナーレを飾る三尺玉が天空に開き音が轟き渡った。この音がまたしても私をタイムトンネルの中に引き込み、半世紀となるビルマ（ミャンマー）の戦場に佇ませてしまうのである。

私の所属部隊、ビルマ派遣第一三〇二部隊・越村隊

が、私の第一機関銃隊名である新発田歩兵第十六連隊、第一大隊、第一機関銃中隊で、昭和十九年七月下旬ベトナムに布陣していた。出動命令が下り、「断戦」に参加のため中国雲南省竜陵方面に進出し、同年九月三日より十月十日まで、最強の中国軍と死闘を重ねたのである。

我が中隊ではこの戦場で四十六人の尊い戦友たちを亡くした。ちなみに交代下山の時点では二個分隊、十六人となり、下士官以上の指揮官は一人もいなかった。残存兵は退きつつナンカンに築壕布陣の後トングーに集結し、十一月中旬日本よりの補充兵員を迎えて部隊の再編成を完了した。

以後、一月初旬まで、編入隊員の機重操作訓練と対戦車攻撃演習を重ね、一月十四日出動命令により「盤

作戦（イラワジ作戦）に参加すべくトング駅を出発した。部隊は弓兵団（第三十三師団）の指揮下に入りメークテラ付近に配備され陣地構築を行い、二月五日メークテラより前進し、第一大隊長（亀岡高夫大尉）指揮の下にイラワジ河畔に迫進した。

ナトジーに集結し終えたある日、中隊命令により「隊員は遺書を記し、頭髮、爪を封筒に入れ提出し、その日の午後、中隊全員集合」の命令があった。全員整列し越村中隊長がイラワジ河畔の現状と戦う決意を述べられ、「敵兵二十對我兵一の死闘である諸君の命は中隊長が戴く」との厳命があった。人事係の高岡准尉から中隊より選抜一個分隊の肉迫攻撃班員の官氏名が発表された。

分隊長伍長大平助吉、上等兵渡辺正蔵、上等兵柳一太郎、一等兵渡辺幸雄、一等兵丸太弘、一等兵中沢藤松、一等兵高橋実、一等兵横塚悌二、一等兵水落孫一郎そして敵M四戦車に体当たりする対戦車用爆弾が兵員に手渡された。この爆弾は現地製でチーク材の厚板で作られ、ちょうど蜜柑箱ほどの大きさで、背負用の

縄が付き発火用の紐を引くと三、五秒で炸裂するものである。縦列より離れた肉迫攻撃分隊員は中隊長の前に整列した。「中隊の生死を賭ける諸君であるが命令があるまで決して死に急ぎはしてはならぬ」と申し渡されたのである。

二月十六日、第一大隊はカランジョンの敵陣地に夜襲攻撃し緒戦の火蓋が切られた。このイラワジ河畔の戦闘について一兵（上等兵）であった私が命長らえることができたその有り難さもさることながら、かの日の全滅陣地での昼夜にわたる真実の死闘の有様を私の知る限り書き残すことが五十回忌を迎えた亡き戦友への饒はなむけと思われ、また戦友たちのお叱りにも報いられるのではないかと思われるのである。

なぜ一兵の私がこのことにこだわるのかと思われるかもしれませんが、戦史であるイラワジ開戦（ビルマ防衛の破綻）防衛庁防衛研修所戦史室著の中にも、新発田連隊史にも水無河畔の全滅陣地記述は見当らず、中隊戦記にもその詳細記はなく断片的な記事であり、ために思い至ったことである。

当時、私は機銃分隊員でなく越村中隊長の護衛兵として三八式歩兵銃を持ち、伝令兼壕（蛸壺）掘り要員で常時中隊長の足下にあつたこと、中隊長は緒戦から亀岡大隊長とよく攻撃準備の打合せをなされておられた。このような状況下の任務で、私は少し身に自由な部分があり戦闘状況が知り得たのである。

資料によると、弓歩二二五会発行の「バゴダのくに」の手に、カンラン、カンランジョン部落は弓部隊の各中隊が既に二月八日より数回にわたり斬り込み戦を行い、二月十五日朝、命令により青葉支隊と戦線の交代が行われたと記されあり、この戦場は弓兵団、青葉兵団が共に死力を尽くし切った戦場であつたのは間違いないのである。

緒戦には敵砲兵陣地まで斬り込みこれを占領し、残置の食糧品を分け合つた勝戦果であつた。以後、毎昼夜の斬り込みを繰り返し、カンラン陣地も一回は成功したが、その度に戦死負傷の戦友が多くなる。しかも、亡骸も埋めてやることすらならず、極度の兵員減少となり、第一機関銃隊は三個分隊ほどとなり、大隊本部

と共に行動をしていたのである。

二月二十五日夜半に四回目のカンランジョン攻撃に前進中、敵の砲弾が落下炸裂し、亀岡大隊長が重傷を受け、数名の兵員が戦死負傷された。副官は加藤三男少尉であつた。大隊長殿の手当は本部の佐藤善達軍医殿及び捧衛生伍長、機関銃隊の江添衛生上等兵たちによつて行われ、中隊長ほか士官がその周りに集まり見守つた。手当が終わると急造担架で弓部隊本部（中隊本部か）の衛生隊に担送し、本隊は大隊長代理（阿部大尉）の指揮の下に斬り込み攻撃を続行した。そして阿部大隊長代理も負傷され、大隊長代理は越村中隊長となつたのである。

二十六日の昼間は敵戦闘機の銃撃のため亀岡大隊長を後送できず、夕方を待つてようやく運ぶこととなり、大隊本部より加藤三男少尉（副官）、小林一郎軍曹、機関銃中隊より桐生貞治上等兵、風間泰一上等兵、本田一郎上等兵、江添治人衛生上等兵が野戦病院に担送し、大隊長は入院された。我々六名は病院横の草むらに三時間ほど眠り、夜半に水無河畔近くの萱の繁る中の蛸

壺陣地に帰着したのである。

翌二十七日夕方、決戦のため水無河右岸の土堤に進出し築壕を開始した。丸一夜、不眠不休の築壕を続行し夜明けを迎えたのである。その一夜は越村大隊長代理は各中隊を回りながら、深く掘れ、労を惜しんではならぬと叱咤し気合を掛けられたのである。全兵員は汗を滴らせながらの全力の工事であった。

布陣は敵に向かつて右より第一機関銃中隊（当初は第一中隊と言われたが兵員減少のため大隊本部要員と陣地を共にした）、我が中隊の兵員は三個分隊三丁の重機のみで一個分隊は六名ほどであった。中隊指揮班の右に小久市伍長の第一分隊、中間には大平助吉伍長の肉迫攻撃分隊（兵員五名）、左に加藤正栄伍長の第二分隊、後方河岸に八藤後仁兵長の第三分隊及び弾薬分隊の布陣であった。本部には副官加藤三男少尉以下要員及び第一中隊、擲弾筒分隊、第二、第三中隊及び工兵中隊水足中尉以下の布陣であり、背後の左岸後方には決死進出の第一大隊砲小隊及び連隊砲、野砲一門が布陣した。

二十八日の夜が白々と明け初めると、早速に敵の偵察機（赤トンボ）が上空に悠々と飛び回り出した。この偵察機に対し歩兵部隊の一斉射撃が行われ、翼には銃弾の穴が無数に見えるのかびくともしない。私も銃での甲盤でも着いているのかびくともしない。私も銃で撃つたが当たったかどうか分からない。その中に越村隊長に呼ばれる。行ったところ本部の小林一郎軍曹（機関銃隊出身）が一緒におられた。風間上等兵、小林軍曹と共にただ今より連隊本部の炊事班に行き、握り飯を出来得る限り作ってもらい、持って来るから同行せよとのことであった。

二人は本部のマンゴ林に向かつて河原を走り出した。二百メートルほどの河原を抜け対岸に上がり、エンドウ豆の畑を過ぎ、砂漠地帯のような所に出ると敵の戦闘機が発見された。機首を下げ旋回しながら執拗に銃撃を繰り返すのである。隠れるボサもなく二人は呼びあいながらそれぞれ必死で駆けながらジグザグに走るより方法がなかった。敵機の搭乗員が首を出し見回しながら四、五回も撃ち込まれた。もう駄目かと幾度も

観念したがどうか炊事班に着くことができ、ちょうど炊き上がったばかりの飯を握ってもらい、バナナの葉に包み、麻袋に入れてそれを背負って二人が前線の部隊本部に帰着した。

その握り飯はいか程の兵員に渡ったか定かではないが、最後の飯であったことは確かである。既に上空には敵戦闘機が飛来し、我が陣に砲を撃ち、機銃掃射を加えつつあった。敵機の間断には、加えて重砲弾、迫撃砲弾が河原いっばいに撃ち込まれ、目も口も開けられぬほどであった。ガダルカナル島戦生き残りの古兵は、敵弾は彼の戦以上であると言ったほどである。

砲弾による敵の攻撃が止むと、前方のカランデオン・カンランの中間地点よりM四戦車の第一回の攻撃が始まった。横一列ジグザグ体形を作りながら轟音と共に約二十両が我が陣地に迫って来たのである。百メートルほど前方で一旦戦車は停止し、一斉に砲撃を加えたのである。我が陣には重機二銃と擲弾筒、ほかに小銃のみであるが、これに全力応戦を加えて戦った。

小出伍長はガ島戦での経験生還者であり、用意周到

であった。予備の銃身を横の穴に置き、また砲兵用の屈折眼鏡もあって、これで敵状及び着弾を確かめ、四番射手の長谷川留吉兵長に指示する。長谷川兵長は壕より腕を伸ばし、押し鉄を押しM四戦車群に撃ちまくった。敵戦車もこの機銃に対し火のたばの応戦である。このため銃身を砕かれ使用不能となり、すぐに予備の銃を据え付けた。敵は我が機銃が撃破されたと感じ、徒歩のグルカ兵が戦車の後より出て動き出すと、小出分隊の銃が再び撃ちまくる。すると驚いた敵は数両の戦車より戦車砲の砲撃である。しかも砲弾による土埃で四圍が見えないが、谷川兵長と二番手大塚兵長は撃ちまくった。がついに戦車砲が命中し、銃が吹き飛ばされたのである。加藤分隊も同様に撃破され分隊長も戦死された。

中隊の機銃は二銃ともなくなり手榴弾のみとなったのである。各中隊も全力応戦したが火機が無と見るやM四戦車がじわじわと前進を開始した。時を待った水足工兵隊より肉迫攻撃兵が突進し戦車二両を爆破したのである。これにより戦車群は再度停止した。

この切迫した死闘にどうしたのか加藤分隊のK兵長が壕より飛び出した。大声で叫びわめきながら各隊員の壕を回り「おい、皆死ぬんだぞ、生きられないぞ」などいいうので中隊長が驚き「風間、K兵長を早く壕に入れろ」と怒鳴る。私が出て壕にむりやり引き込んだが、「再び飛び出しわめき出し敵砲弾により河原上で死された。K兵長は気が動転し止まらなくなったのであろう。

やがて戦車は右側に回り込みながら警戒しつつ攻撃を開始した。我が陣ではこれに対応できるのは肉迫攻撃分隊だけである。しかし隊長も大平分隊長も敵戦車までの距離が遠すぎるから早まってはならぬと言われたが、迫る轟音に待ち切れず、「掛かります」と叫んで一番手の渡辺正蔵上等兵が壕より飛び出し戦車に突進した。これを見付けた数両の戦車が一齐に銃砲撃を加えてきた。これにより途中にて爆弾と共に散華された。しかも続いて二番手の丸田一等兵が分隊長の止めるのを振り切り「掛かります」と叫んで壕より飛び出し戦車に向かったところ、正面より額を撃ち抜かれ戦

死された。すぐに大平分隊長と私が両足を持ち壕内に引き下げた。分隊長は合掌し、血のしたたる丸田一等兵の指を切り取りガーゼに包み、「風間命があつたら頼む」と渡された。私は胸のポケットに納めた。

この肉迫攻撃を知ったM四戦車はまた右方向に大回りしつつ水無河の右岸に進み、先ず一両が下がり二両目が河原に下りかかった。このとき、副官の加藤三男少尉が大声で「擲弾筒分隊、弾があるか」と叫んだ、すると兵員より残弾三発の音がした。すぐ前方の渡河戦車を撃つと命令され擲弾筒の一弾がちょうど一両目の戦車の全面に当たった。そのため戦車は前進を停止した。続いて二弾三弾と撃ち込み、我が火機は完全に無くなった。

このとき、越村大隊長代理は壕を飛び出し、軍刀を抜き、第一大隊に玉碎突撃の命令を下したのである。兵員我々は手榴弾を持ち壕より飛び出したのであるが、高岡准尉や当番の関根兵長らが隊長に抱き付き、隊長を静めながら壕に入れ、戦車までの距離があり過ぎて突つ込めば、一大隊全兵員が無駄死にであると思見具

申し、思い止めたのである。そして新たに越村隊長は命令を下し、各隊各員は河原を渡り、連隊本部のマンガ林の地点まで後退せよと号令した。

兵員は呼応して壕を飛び出し、大回りに後方左岸に向かつて全力で駆け出した。すると河原に下りたM四戦車二両が下がる我が兵員に銃撃を加え、その足元に着弾の土煙が立つが斃れる兵の姿は見えなかった。ほとんどが対岸に逃れることができたのである。

戦車群は一斉に前進を開始し、数両が後方左岸に上がり、我が陣の背後より戦車砲を撃ち出した。機関銃中隊は最も右側陣地の為に隊長と共に下がることができなく、一体となつての脱出が不可能となり、壕内に沈黙せざるを得なかったのである。

この状況下に副官加藤三男少尉は立て膝で敵の行動を偵察しており、戦車砲の直撃を受け壮烈な戦死をされた。後方左岸に進んだ戦車は大隊砲、連隊砲、野砲一門の決死の○距離砲撃に数回爆破擱坐されたが、たちまち反撃され砲陣地は全滅された。前面の戦車は近くに停止し、後方左岸上の戦車は我々の壕を片端から

砲撃を加え、人影が動くとこれを爆破しだした。

私は自分の深い壕を飛び出し戻ることができず、空いた壕に入っていた。その中で銃を立てかけ最後の命と覚悟し、父母よりもらったお守り袋をそっと出し、

「断作戦」にでも開けなかった汗とシラミの殻で真っ黒な袋の口を開けてみた。そのお守りは般若心経を書き込んだ折り込みものと成田山のお札であった。私は再び閉じて首に掛け直した。手榴弾の一発を帯革の腹の前に結び、もう一発を握り敵兵が突入してきたら発火して飛び出す用意をしたのである。すると「敵兵が突っ込んで来たぞ」との声がしたと同時に私の壕の左の戦友の壕に戦車砲弾が打ち込まれ、炸裂し、そのちようど死角にいた私は首を吹き飛ばされた感じで「やられた」と一声叫び失神したのである。

突っ込んで来た敵歩兵部隊は、我が陣の壕に次々に手榴弾を投げ込み、跳び出す兵を射殺した（敵はこの時火焰放射機を使わなかったため）。これを壕より投げ返した（敵の手榴弾は精度がよく自動撃鉄になっており、投げてから発火し時間数秒も日本製より長かった）。

そのためか壕が深く屈曲した中の兵、壕に埋まった兵（私のごとく半身埋り失神した兵）が生き残ったのである。戦車群は全両水無河を渡り対岸畑中の部落に集結し布陣した。

やがて夜に入りつつある中で、越村大隊長代理は深く屈曲した壕の中で健在だった（この壕は私に指示し幅約二尺、奥行五尺、さらに右折し奥行四尺、さらに左折して中三尺四方の堅固な壕である）。隊長は無傷の諸橋弥一郎上等兵、本田一郎上等兵を我が陣内を回らせ、生き残った者を集めた（私は諸橋上等兵に掘り出され助けていただいた）。その時点で集まった兵員は、越村大隊長、高岡准尉（重傷）、小出伍長（負傷）、関根兵長（隊長当番兵）、田村兵長（重傷）、本田上等兵、風間上等兵（負傷）、諸橋上等兵、小坂井一等兵、江添衛生上等兵（負傷）彼は飯盒を捜すと別れ一人行動となる。結果的に九名となり脱出の指示を受けた。

高岡准尉は壕に投げ込まれた教発の敵の手榴弾を拾っては外に投げ出したが、その一発が壕口のボサに当たり破裂し、全身に破片を受け重傷したのであった。

准尉を天幕に包み、無傷の兵が引きずりながら河原を渡り左岸の土堤下に着いた。土堤上には敵の兵が二人動哨し英語の音がする。この敵兵をやり過ごし、隊長がうめき声を出す高岡准尉に我慢してくれとなだめながら全員が匍匐しつつ豆畑を横切り、マンゴ林の中の連隊本部に辿り着いたのである。

越村隊長は本部に報告に行くと、若い参謀は酒を匂わせ罵倒し殴られたと聞いている。全弾を撃ち尽くし敵M四戦車に包囲され、かつ歩兵部隊により全滅となった死闘の一線を見分けなく、ただ兵に大死にを厳命したのである。この文を記しながら思う。二月二十八日の全滅陣地は第一機関銃中隊が犠牲となりあの時点で玉碎突撃を実行していたら、完全に第一大隊は戦車群と敵歩兵部隊により全滅されたであろう。

また勇氣を持つて意見具申を聞き、残存兵員を後退させた越村隊長、高岡准尉殿こそ真の指揮者であったと確信し、今もその思いである。一指揮官、一参謀の命令がいかに兵員の生死を左右するかを考えさせられるのである。

ここで改めて戦史より二月二十六、七、八、日ごろの状況を抜粋した。

イラワジ会戦史P五八一による田中信男中将日記

「青葉部隊、タリンゴン陣地奪取の吉報は積日のウツを散ずるに足る。結局タリンゴンの攻略に五〇〇名の犠牲を払へり。

二月二十七日、敵機甲兵団は背後深く突入、しかも敵執拗かつ頑強。隣の兵団には更に優勢なる敵渡河し来る。二月二十八日夕刻三浦（祐造）参謀を帯同して第一線を巡視す。青葉部隊に至るや直感的に空気險悪なり、戦車二〇輛を有する六〇〇の敵が来攻し潰乱状態なり、井上大佐を叱咤して歩兵十六連隊の名譽のため攻撃再行を命ず。十榴一門敵戦車の蹂躪を受け火砲を放棄せるものの如し悲壮悲惨なる光景なり」

新発田連隊史 P二一五

「第一大隊は既に大隊長負傷し、第二中隊長阿部大尉に代りて大隊長代理となり敵機一機を撃墜するの大戦果を挙げた。この戦機に乗じて宿敵タリンゴンの陣

地を強行突破すべく第三大隊長代理、根津大尉以下將兵の決死敢闘、同夜主力を持って殴り込みを行い奮戦乱闘五六時間の後、遂にこれを確保した。

二月二十六日第一大隊正面の敵は総反攻を行ってきた。ミンム渡河点方面より敵兵俄に激増し、かつタリンゴンの攻略後は敵の主攻撃の正面となったものごとく戦車二十数輛、歩兵六、七〇〇を基幹とする敵は、空陸呼応し怒濤の如く殺到してきた。大隊將兵克これを所在に遊撃し忠勇なる我が肉攻班も又能く勇敢なる斬り込み隊と協力し戦車撃滅に数昼夜を費やした」

以上であるが、水無河畔の死闘は記述にはない。師団より残され青葉兵団となり死闘を演じた歩兵十六連隊兵員だった我々戦友は、誰彼の別無くこの命の続く限り、若くして斃れた亡き友の御霊に合掌し、ひたすら御冥福を祈り、その思いを大切にしてゆかねばならぬと思う。「中隊戦死者四十三名」

拙歌五首

遠雷に タイムトンネルを一人抜け

イラワジ河畔の戦場に佇つ

ビルマにて 敵を斃せし両の掌を

淨む念ひに 木のほとけ彫る

戦友等は ビルマの山にイラワジに

骸となりぬ 木の仏彫る

人間を兵に仕立てて銃剣を

持たせ戦に誘ひむなけれ

湾岸の戦の勝者敗者とも

兵のみが死して権者が残る

亡き戦友の五十会忌に当りひたすら合掌す。

【解説】

―第一大隊の水無河畔の全滅陣地―

体験記執筆者風間氏は、まさにイラワジ作戦の増強

部隊とし急遽第三十三師団(弓)の指揮下に入り、特

に題名、水無河畔戦闘の生き残りの勇士である。

戦史に残らぬ全滅陣地であるが、解説者も「戦史叢

書イラワジ会戦―ビルマ防衛の破綻」を読んだが、配

属先の第三十三師団長田中信男中将の日記、二月十日

―三月一日の二月二十七日に

「敵機甲兵団は背後深く突入、而も敵執拗且頑強、

隣兵団には更に優勢なる敵渡河し来る」。

二十八日「夕刻三浦(裕三)参謀を帯同して第一線を

巡視す。青葉部隊に到るや直感的に空気險悪なり。

戦車二〇を有する六〇〇の敵来攻し潰乱状態なり。

井上大佐を叱咤して歩兵第十六聯隊のため攻撃再行

を命ず」

「十榴一門敵戦車の蹂躪を受けて火炮を放棄せるも

の如し。この間敵砲弾付近に落下す。悲壯悲惨な

るなり」

三月一日「南レトバンジン部落猛爆を受け全焼す。

敵は部落という部落を焼き払う意か。今日も亦阿鼻

叫喚を眼の辺りに見る。軍司令官より電話あり。

「その正面を頼む」との言葉、命がけてやっっている

が御期待に副はざること遺憾とす」

兵も隊長も部隊長も、聯隊の名誉にかけて、文字通

り命をかけて玉碎、全滅を賭して、敵戦車群、追尾する敵部隊と戦っている。「その正面を頼む」は、大本营も、ビルマ方面軍も、第十五軍司令官も同じであろう。しかし、第三十三師団長も、その指揮下にあった歩兵第十六連隊長も「命がけでやっているが御期待に副はざるを遺憾とす」とは、部下の壮烈な戦死、悲惨な戦場を見ながら、血涙をのんでの言葉である。

その後、英印軍はイラワジ河南岸に確実な陣を確保する。機動力に富み、優勢な空地の火力により援護された英印軍は完全に戦場を支配し、楔入された機械化兵団は一気にメークテラーを占領した。かくてイラワジ会戦は間もなく各戦線ごと崩壊し始めた。と公刊戦史にある。

公刊戦史は戦闘詳報、陣中日誌ではなく、戦闘状況を細部にわたって記述、掲載される部分は極めて限られていて残念である。しかし、歩兵第十六連隊と太平洋戦争と副題にある「あやめ戦記」(一〇七八頁の労作)「イラワジ河畔会戦」第一機関銃隊員三〇名の手記が掲載されている。その中に「水無河の戦闘」等があ

り、「イラワジ河畔会戦座談会」の中に「イラワジ河畔大戦車戦」で戦闘状況が語られている。